

第三者意見



公立大学法人 滋賀県立大学
理事・副学長 仁連孝昭

京都大学大学院経済学研究科修了。広島大学総合科学部、日本福祉大学経済学部を経て滋賀県立大学環境科学部教授に1995年設立と同時に就任。2009年より現職。専門はエコロジー・経済学。著書「環境経済・政策学会講座 環境と開発」(岩波書店)ほか。社会貢献活動としてNPO法人エコ村ネットワーク理事長、公益社団法人滋賀県環境保全協会会長などを務める。学会活動では水資源・環境学会理事、日本環境共生学会理事など。

滋賀銀行の特徴はCSRを銀行経営の柱のひとつとして位置づけ、それを実質化することに毎年努力を積み重ねているところにある。「自分にきびしく 人には親切 社会につくす」という行是が銀行の業務内容や従業員の振る舞いに反映されていく姿をみるたびに、滋賀銀行のCSRが着実に根付いてきていることが分かる。

本来、地方銀行は地域社会の発展のために存在するものであり、地域社会の将来を見据え、その発展を支える金融活動がその本務である。なお、地域社会は環境、社会そして経済が健全に保たれてこそ発展するものであり、社会の特定分野だけに基盤を持った産業が成長したとしても、地域社会の発展が脅かされる場合がある。滋賀銀行がCSRに取り組むということは環境、社会、経済を視野に入れた地域社会の健全な発展にいかに関与しているかで評価されるべきである。なかでも環境と銀行との関係は見えにくいものであるが、滋賀銀行と環境とのかかわりでCSR活動を評価したい。

—お金の流れで地球環境を守る活動—

この分野での取り組みとしてSRI(社会的責任投資)ファンドを取り扱うことにより、地球環境を配慮した融資先を選定する努力がまずあげられる。また、地元企業の環境行動を促す環境格付として「PLB格付」と「PLB格付BD」を独自に導入し、環境格付の高い企業に最大年0.6%の融資金利優遇を実施していることも高く評価できる。さらに挑戦的な取り組みとして実施された2008年の「カーボンオフセット定期預金『未来の種』」と「事業者向け環境配慮型融資『未来の芽』」は預金、融資枠とも60億円と限定的なものであったが、高く評価されている。今後もこのような挑戦的な取り組みに期待したい。「カーボンニュートラルローン 未来よし」はこのローンを利用して導入された自然エネルギーで削減される温室効果ガスの排出量に相当する金額を琵琶湖の固有種の保護・育成事業に拠出するものであり、これも夢のある取り組みとなっている。銀行の本来業務に環境とのかかわりを意識的に導入する先進的な取り組みを次々に導入する姿勢は高く評価できる。

—環境コミュニケーション活動—

これからの産業の発展分野として環境ビジネス分野を外すことができない。滋賀銀行は、環境ビジネスを滋賀で発展させるために、「エコビジネスマッチングフェア」を開催し、企業の持っている経営資源をビジネスにつなげる機会を提供している。また「サタデー起業塾」は「産学官・金」連携の起業塾として定着し、環境ビジネス展開事例や大学等研究機関のビジネスシーズを学ぶ場となり、ビジネス・ニーズとシーズのマッチングやビジネス創出の機会をつくりだしている。ここでも環境と共存する産業発展を支えようとする銀行の姿勢が明確である。

その他、第4次長期経営計画の「CO₂排出量25%削減」の取り組み、エコオフィスづくり、里山保全、ヨシ刈り、学校ビオトープなどの生物多様性に向けた取り組み、環境会計の導入などを通じて役職員の中に、環境をはじめとする地域社会と銀行の共存共栄についての意識を常に醸成する環境が整っている点を高く評価するとともに、その成果に期待したい。

編集後記

今回で11回目を迎える「CSRレポート」の制作にあたり、大切にしたいことは“しがざん”らしさです。

当行は、近江商人の経営哲学「三方よし」を、「売り手よし」=企業の持続性(サステナビリティ)、「買い手よし」=顧客満足(CS)、「世間よし」=将来社会、将来世代に対する責任と考えています。

地方銀行として、日頃どのような思いで「三方よし」のCSR活動を行っているのか、少しでも感じ取っていただければ幸いです。

当行のCSR活動を映す“鏡”である、「CSRレポート2011 未来をみつめて」を通じて、それぞれの活動に込められた思いをご理解いただくとともに、お客さまとのコミュニケーションをさらに深めていきたいと考えています。皆さまのご意見をお待ちしております。

総合企画部CSR室